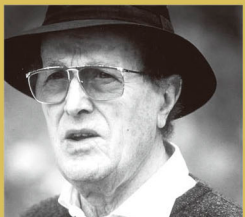


永遠のオリヴェイラ

Manoel de Oliveira
para Sempre



Coleção Cinemateca Portuguesa-Museu do Cinema

マノエル・ド・オリヴェイラ Manoel de Oliveira

1908年12月11日にポルトガル北部の港町ボルトに生まれる。1931年に初監督作『ドウロ河』を撮り、42年に初の劇場用長篇映画『アニキ・ボボ』を発表。家業を続けながら映画制作を続け、62年に長篇第2作『春の劇』を発表するが、「ポルトガルには検閲が存在する」という発言によって投獄される。10年を経て1972年3本目の長篇『過去と現在 昔の恋、今の恋』を発表。1974年独裁政権が終わり、オリヴェイラは『ベルニデまたは聖母』(75)、『破滅の愛』(78)、『フランシスカ』(81)と「挫折した愛の四部作」を構成する作品をつぎつぎに発表。また、敏腕プロデューサーのパウロ・ブランコと組み、自分の望む企画を実現できる環境を得る。以後、上映時間6時間50分の大作『緋子の靴』(85)、『神曲』(91)、『アブラハム溪谷』(93)、『世界の始まりへの旅』(97)、『クレヴの奥方』(99)などの輝かしい傑作をつくり続け、2000年代に入り、90歳をこえてもなお、ミシェル・ピコリ(『家路』01)、ジョン・マルコヴィッチ(『永遠の語らい』03)、カトリーヌ・ドヌーヴ(『永遠の語らい』03)、ビュル・オジェ(『永遠の語らい』03)、ジャンヌ・モロー(『永遠の語らい』03)といった世界的名優を迎えて、作品を生み出し続けた。2014年のヴェネチア国際映画祭で短篇『レステロの老人』上映。2015年4月2日没。享年106歳。

Exibição Comemorativa da Obra do Cineasta r^a Parte マノエル・ド・オリヴェイラ監督追悼特集——Part.1 2016. 9.10〔土〕— 9.25〔日〕の土日祝

上映スケジュール

- 各回入れ替え制です ●15分前に開場します
- 開映30分後以降のご入場はお断りします

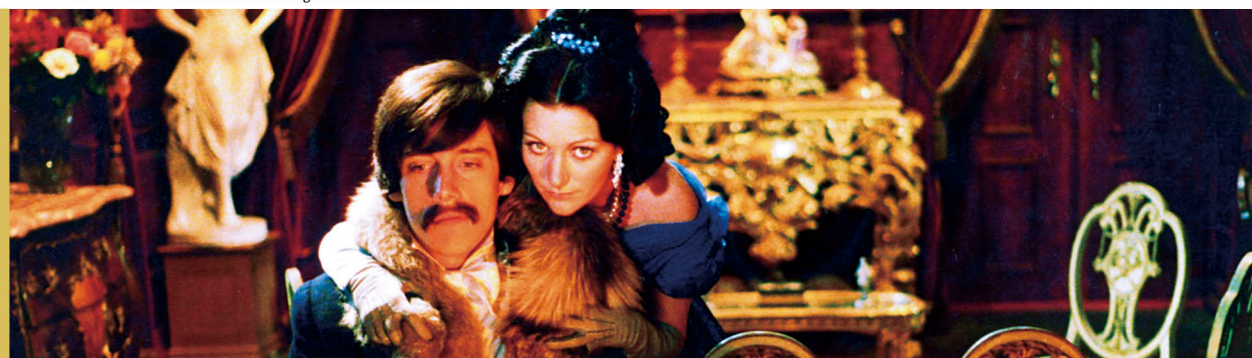
9/10〔土〕	11:00	過去と現在 昔の恋、今の恋
	14:00	フランシスカ
9/11〔日〕	11:00	階段通りの人々
	14:00	アブラハム溪谷
9/17〔土〕	11:00	春の劇
	14:00	神曲
9/18〔日〕	11:00	カニバイシュ
	14:00	過去と現在 昔の恋、今の恋
9/19〔月・祝〕	11:00	ノン、あるいは支配の虚しい栄光
	14:00	アブラハム溪谷
9/22〔木・祝〕	11:00	神曲
	14:00	ノン、あるいは支配の虚しい栄光
9/24〔土〕	11:00	カニバイシュ
	14:00	階段通りの人々
9/25〔日〕	11:00	レステロの老人+アニキ・ボボ
	14:00	フランシスカ

料金

- 当日券のみ(1プログラムにつき) ●各回上映1時間前から発売します

- ◆一般 600円
- ◆大学・高校生・65歳以上 500円
- ◆小中学生・友の会会員 400円
- ◆未就学児・障害者手帳等をお持ちの方及びその介護者 無料

フランシスカ Col. Cinemateca Portuguesa-Museu do Cinema



永遠のオリヴェイラ

Manoel de Oliveira
para Sempre



Fotografia: Henrique Calvet / Coleção Cinemateca Portuguesa-Museu do Cinema

Exibição Comemorativa da Obra do Cineasta r^a Parte マノエル・ド・オリヴェイラ監督追悼特集——Part.1

2016. 9.10〔土〕— 9.25〔日〕の土日祝(8日間)
川崎市市民ミュージアム

主催:川崎市市民ミュージアム／一般社団法人コミュニティシネマセンター 共催:ポルトガル大使館
特別協力:東京国立近代美術館フィルムセンター／アテネ・フランセ文化センター／岩波ホール
協力:日本ポルトガル協会



今後の上映予定

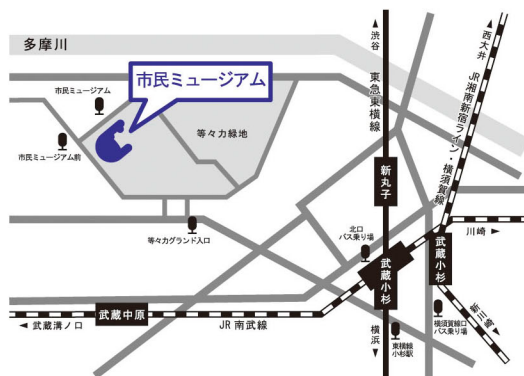
●10/1〔土〕～29〔土〕の土日祝
旅する映画

—「旅する人々」展開連上映—

Part1 ゴーヴィンダン・アラヴィンダン特集
『魔法使いのおじいさん』『サーカス』
『追われた人々』
『オリダット・あるところで』
『黄昏』『エスタッパン』

Part2 世界旅行へのいざない

●11/3〔木・祝〕～27〔日〕の土日祝
川崎ゆかりの映画人



アクセス

JR・東急「武蔵小杉駅」からバスで約10分

- 北口1番乗り場から川崎市バス
〔杉40〕市民ミュージアム行終点下車
〔杉40〕中原駅前行「市民ミュージアム前」下車すぐ
〔溝05〕溝口駅前行「市民ミュージアム前」下車すぐ
- 南口「東横線小杉駅」バス停から東急バス
〔川133〕市民ミュージアム行終点下車
〔川05〕市民ミュージアム行終点下車
- 当館に専用駐車場はありません。お車でお越しの方は
等々力緑地内駐車場(有料)をご利用ください。

川崎市
市民ミュージアム

〒211-0052 川崎市中原区等々力1-2(等々力緑地内)
TEL.044-754-4500 <http://www.kawasaki-museum.jp>



永遠のオリヴェイラ

Manoel de Oliveira
para Sempre

現役最高齢の映画作家として数多くの作品をつくり続けたマノエル・ド・オリヴェイラ監督が、2015年4月2日に106歳で亡くなりました。日本では、1993年に開催されたポルトガル映画祭で、初めてオリヴェイラ特集が組まれ、同年の東京国際映画祭で『アブラハム溪谷』が最優秀芸術貢献賞を受賞、オリヴェイラ監督という偉大な映画作家の存在を知らしめました。これ以後、ほとんどの長篇が劇場公開され、オリヴェイラ監督は日本の映画ファンが最も敬愛する映画作家となりました。

本特集では、80年をこえる映画人生でマノエル・ド・オリヴェイラ監督が遺してくれた珠玉の作品群より、監督第一作『アニキ・ボボ』(1942)から遺作となった『レステロの老人』(2014)まで、日本未公開作『フランシスカ』(1981)を含め、Part1として1990年代以前の作品を中心として10本を上映します。



9/10[土]14:00 | 9/25[日]14:00

フランシスカ

Francisca

1981年 | カラー | 35mm | 166分 | 監督・脚本:マノエル・ド・オリヴェイラ | 原作:アグスティナ・ベッサールイス「ファニー・オーウェン」 | 撮影:エルソ・ロク | エグゼクティブ・プロデューサー:パウロ・ブランコ | 出演:テレサ・メネデス、ディオゴ・ドーリア、マリオ・パローゾ、マヌエラ・フレイタス、セシリア・ギマランイス、パウロ・ローシャ

1850年代のポルト。小説家カミーロ・カステロ・ブランコと友人のジョゼ・アウグスト、そして「フランシスカ」と呼ばれる英国人の娘ファニー・オーウェン、実在した3人の恋の物語をもとにアグスティナ・ベッサールイスが書いた小説「ファニー・オーウェン」を映画化した。2人の男に愛されたフランシスカはジョゼを選ぶが、3人の関係は悲劇的な結末を迎える。『過去と現在 昔の恋、今の恋』、『ペニルデまたは聖母』、『破滅の恋』とともに「挫折した愛の四部作」を構成する。オリヴェイラが、プロデューサーのパウロ・ブランコと組んだ最初の作品であり、以後ブランコは30年以上にわたり、オリヴェイラの全盛時代を支えた。



9/25[日]11:00

アニキ・ボボ

Aniki Bóbo

1942年 | モノクロ | 35mm | 71分 | 監督・脚本:マノエル・ド・オリヴェイラ | 撮影:アントニオ・メンデス | 出演:ナシメント・フェルナンデス、フェルナンダ・マトス、オラシオ・シルヴァ

オリヴェイラの長篇デビュー作。陽光降り注ぐポルトの街を舞台に、躍動するアナーキーな少年少女たちを縦横無尽に活写してネオレアリズモの先駆的作品と見なされる。「アニキ・ボボ」とは警官・泥棒という遊びの名前。幼い恋の冒険を「罪悪」と「友愛」の寓意へ変貌させる演出のスケール感はずでにして巨大。



*『アニキ・ボボ』と同時上映

レステロの老人

O Velho do Restelo

2014年 | カラー | DCP | 19分 | 監督・脚本:マノエル・ド・オリヴェイラ | 撮影:レナート・ベルタ | 出演:ルイス・ミゲル・シントラ、リカルド・トレバ、ディオゴ・ドーリア

ポルトガルの大航海時代を詠った国民詩人カモンイス、「ドン・キホーテ」の作者セルヴァンテス、『破滅の愛』の原作者である19世紀ポルトガル・ロマン派の小説家カステロ・ブランコ、20世紀初頭の詩人パスコアイス。4人の文学者がポルトガルの過去と未来について語り合う。タイトルである「レステロの老人」は、大航海時代の栄光に異を唱える人物として、カモンイスの詩「ウズ・ルジアダス」の中に登場する。



9/17[土]11:00

春の劇

Acto de Primavera

1963年 | カラー | 35mm | 91分 | 監督・脚本・撮影:マノエル・ド・オリヴェイラ | 出演:ニコラウ・ヌネス・ダ・シルヴァ、エルクメンダ・ビレシュ、マリア・マダレーナ

16世紀に書かれたテキストに基づいて山村クラリエで上演されるキリスト受難劇の記録。自ら「作品歴のターニングポイント」と述べる本作でオリヴェイラが発見したのは「上演の映画」という極めて豊かな脈筋だった。一見して不自然な「虚構」のドキュメントだけが喚起する謎と緊張。前人未踏の「映画を超えた映画」の始まり。



9/10[土]11:00 | 9/18[日]14:00

過去と現在 昔の恋、今の恋

O Passado e o Presente

1972年 | カラー | 35mm | 115分 | 監督・脚本:マノエル・ド・オリヴェイラ | 撮影:アカシオ・ド・アルメイダ | 出演:マリア・ド・サイゼット、マヌエラ・ド・フレイタス、ペドロ・ピニエロ

長篇劇映画第三作。ヴィンセンテ・サンチェスの戯曲「過去と現在」を監督が自ら映画用に翻案。『フランシスカ』に至る「挫折した愛の四部作」の第一部にあたる。現在の夫に心を開かず、事故死した最初の夫への想いを募らせる妻ヴァンダを中心に、過去と現在、死者と生者の間を交差する奇妙な愛が描かれる。



9/18[日]11:00 | 9/24[土]11:00

カニバイシュ

Os Canibais

1988年 | カラー | 35mm | 91分 | 監督・脚本:マノエル・ド・オリヴェイラ | 撮影:マリオ・パローゾ | 出演:ルイス・ミゲル・シントラ、レオノール・シルヴェイラ、ディオゴ・ドーリア

『過去と現在』から音楽を担当してきたジョアン・パエスとともに作られたオペラ・ブッフファ映画。厳かに進行する貴族たちの晩餐会は、やがて、タイトルが予告する驚愕の食人場面へ。人間と動物、人間と機械、見せかけと本質……ヴァイオリンの調べに乗ってあらゆる境界が軽々と侵される。



9/19[月・祝]11:00 | 9/22[木・祝]14:00

ノン、あるいは支配の空しい栄光

Non, ou a Vã Gloria de Mandar

1990年 | カラー | 35mm | 110分 | 監督:マノエル・ド・オリヴェイラ | 脚本:マノエル・ド・オリヴェイラ、ジョアン・マルケス | 撮影:エルソ・ロク | 出演:ルイス・ミゲル・シントラ、ディオゴ・ドーリア、ミゲル・ギリエルメ、ルイス・リュカ

1974年、独立戦争が長期化していたアフリカのポルトガル植民地で、疲弊した兵士たちは戦争の意味と自国の歴史を振り返る。カモンイスの叙事詩「ウズ・ルジアダス」、アントニオ・ヴェイラ神父、フェルナンド・ペソア、ジョゼ・レジオなどの文学作品に想を得て、ローマ時代から20世紀まで、ポルトガル民族の2000年にわたる歴史の中の四つの敗北の物語を描く、オリヴェイラによる壮大な歴史・戦争映画。



9/17[土]14:00 | 9/22[木・祝]11:00

神曲

A Divina Comédia

1991年 | カラー | 35mm | 141分 | 監督・脚本:マノエル・ド・オリヴェイラ | 撮影:イワン・コゼルカ | 出演:マリア・ド・メディロス、ミゲル・ギリエルメ、ルイス・ミゲル・シントラ

「精神を病める人々」の表札が掲げられた邸宅で、アダムとイブ、キリスト、ラスコリーニコフ、ニーチェのアンチ・キリストら歴史的文学作品の登場人物たちが、信仰と理性と愛についての議論を戦わせる。西洋古典の深奥に分け入りながらも「まったく未知なものとして、絶対的な驚き」とともに再び映像として蘇らせるオリヴェイラ芸術の真骨頂。



9/11[日]14:00 | 9/19[月・祝]14:00

アブラハム溪谷

Vale Abraão

1993年 | カラー | 35mm | 188分 | 監督・脚本:マノエル・ド・オリヴェイラ | 撮影:マリオ・パローゾ | 出演:レオノール・シルヴェイラ、セシル・サンズ・ド・アルバ、ルイス・ミゲル・シントラ | フィルム提供:東京国立近代美術館フィルムセンター

フロバール「ボヴァリー夫人」をもとにポルトガル文学の巨匠アグスティナ・ベッサールイスが原作を執筆。彫琢された言葉の響きとオリヴェイラの完璧な映像が火花を散らす“文芸映画”の最高峰。監督が追求し続ける女性美が、主人公エマを演じるレオノール・シルヴェイラと洗濯女を演じるイザベル・ルトの両極に具現する。



9/11[日]11:00 | 9/24[土]14:00

階段通りの人々

A Caixa

1994年 | カラー | 35mm | 96分 | 監督・脚本:マノエル・ド・オリヴェイラ | 撮影:マリオ・パローゾ | 出演:ルイス・ミゲル・シントラ、ベアトリス・バタルダ、フィリペ・コジョフェル | フィルム提供:東京国立近代美術館フィルムセンター

リスボンの街路を舞台にした群像劇。「すべての私の映画同様、『階段通りの人々』は人生から沸きだした特別な何かだ。それは貧しくて周縁にいる、ほとんど忘れられた人々の目を通した真の人間性のポートレイトだ。これは1920年代の映画、初期映画への回帰を示す映画なのだ」。